

「想像力という防犯」

古川学園高等学校 2 年

守谷 鳳甫さん

「どこまで想像できるだろう。」薬物依存という言葉に。「自分とは無縁の世界、いつでも引き返せる。」と線引きをしていないだろうか。しかし、その危険は必ずしも怪しい姿で近づいてくるとは限らない。自然で魅力的な姿で僕たちの日常に溶けこんでいる。

以前、薬物の番組を見ながら、母に「友達から『これ、みんなで食べない？お気に入りなんだ』と勧められたら食べる？」と聞かれたことがある。初めて見る包み紙でも普通のチョコレートに見えたら、躊躇せず、みんなと笑顔で食べる自分を容易に想像できた。さらに母は「『眠気覚ましにもなるから大人気なんだ。』と言われたら、どうする？」と。僕はハッとした。自覚のないまま、依存への扉をこんなにも自然で簡単に開けてしまうのだと思った。また、たとえ危険かとも思いながらも、信頼している友達だから、みんなが食べているからと、その場の空気感に流されてしまうかもしれない自分に恐怖を感じた。いつもなら機能するはずの心のブレーキをかけられない気の緩みを突き付けられた気がした。

そもそも、明らかに怪しいものには最初から近寄らない。しかし、それがゲームやネット、好きなお菓子などならどうだろう。嫌なことを考えずにいられる時間は、止めようと思っても、ついつい続けてしまう。気づけばそればかりに逃げ頼っている。つまり依存である。人間は弱い生き物だ。いけないと理解していても、嫌なことや悩みがある時ほど、人は楽な方へと逃げてしまう。身近な所に依存の入り口はあるのだと思った。

僕は、その一口で、その先にどんなことが起きるのか、それを「想像する力」がブレーキの一つになると思う。たった一口の味が忘れられず、犯罪をおこしてまで薬物を手に入れようとする強い依存性。脳を破壊され自分の意思では止める力を失うこと。大切な友達や家族との平穏な生活を壊す未来。これらをリアルに想像できたら、立ち止まって考え、見極める力になり、流されずに断る勇氣にも繋がるはずだ。でも、心が弱っている時の想像力には限界がある。また、周囲を疑うことは寂しい。相手が友達なら尚更だ。だからこそ、「これヤバくね？」と普段から言い合える関係性が大切だ。どちらかが想像力が落ちている時でも「いつもと違う」という小さな違和感に気付き、声を掛け合ってお互いのブレーキになれる。誘惑を見極める盾にもなるはずだ。それは、一人で抱え込まず一緒に相談する勇氣にもなる。

防犯とは、警察や大人が行うものだけではない。命や当たり前の毎日を自分たちの手で守ろうとする気持ちを持つこと。みんなで想像力と見極める解像度を上げることなど、日常のあらゆる場面に防犯の意識を散りばめていくこと。その日頃からの小さなアクションが備えとなって、最強の防犯になると僕は信じている。